

エチオピアへき地における教育開発

複式学級の意義と課題

大津和子

(北海道教育大学札幌校)

Educational Development in Rural Ethiopia

Kazuko OTSU

はじめに

複式学級制度は、先進工業国でも開発途上国でも採用されている。生徒数が少なく十分な数の教員を雇用できない学校で、やむをえず複式学級にせざるを得ない場合だけではなく、フィンランドなどに見られるように、むしろ複式学級の利点を積極的に認めて、複式学級を編成している事例もある。

本稿では、開発途上国であるエチオピアにおける複式学級の意義と課題を明らかにする。まずエチオピアの教育開発の現状を概観した後、複式学級パイロットプロジェクトの展開を検討し、パイロット校の事例を分析したうえで、複式学級政策の意義と課題を明らかにする。研究方法は、2006年10-11月および2007年3月に実施した現地調査(資料収集、インタビュー、観察など)による。

1 エチオピアの教育開発

(1) エチオピアの概況

エチオピアは、1974年以来の内戦が1991年に終結した後、エチオピア連邦民主共和国を樹立し、現在は連邦制をとっている。東アフリカ北部に位置する内陸国で、1,100,000km²(日本の約3倍)の国土は高地から低地まで変化に富み、気候も高山気候・熱帯サバナ・ステップ気候と多様であるが、しばしば旱魃に見舞われる地域もある。人口はアフリカ大陸で2番目に多く、73,000,000人以上と推計されている。オロモ(約40%)、アムハラ(約30%)など80以上の民族からなり、60以上の言語が使用されているといわれる。アムハラ語と英語が公用語とされているが、オロモ語など各地域の言語も学校教育に取り入れられている。宗教的にはエチオピア正教徒(約

50%)とムスリム(約30%)が多数を占めている。

エチオピアは、一人当たりGNI(国民総所得)が110US\$ (UNICEF, 2006)、国民の44%が貧困ライン以下の生活をしている(Shibeshi, 2005: p7)という、世界最貧国の一つである。GDP(国内総生産)の約54%がコーヒー、メイズ、テフ、ソルガム、大麦などを中心とする農産物で占められている。特にコーヒーは、エチオピアがコーヒーの原産地ということもあり、国民の4人に一人がコーヒー栽培・加工工場・運搬・販売など、コーヒー関連の職業に就いているといわれる。コーヒーはエチオピアの主要輸出品であるが、近年のコーヒー国際価格の低迷によってエチオピア経済は大きな打撃を受けている。

(2) 教育開発の現状

こうした経済状況のもとで、エチオピア政府は、1997年に第一次教育セクター開発プログラム(ESDP I: Education Sector Development Program I (1997/98-2001/02))を発表した。2015年までに初等教育を完全普及することが目標とされ、男女格差、地域格差の是正が強調された。この期間に、初等教育総就学率は41.8%から61.6%に大きく向上したが、地域格差および男女格差はほとんど縮小していない(MoE, 2002: p30)。

エチオピア政府は引き続きESDP II(2000/01-2004/5)を発表し、さらにESDP I, ESDP IIを継続発展させてESDP III(2005/6-2009/10)を策定し、「2015年までに学齢期のすべての子どもが初等教育を受け、将来、国家の民主主義と開発の担い手となる国民のすべてのレベルにおいて、訓練されスキルをもつ人的能力を開発する」ことを目指して教育開発を進めている(MoE, 2005)。

エチオピアの教育制度は、初等教育が8年間で、それ

表1 小学校の総就学率 (MoE, 2007: p4)

	第1サイクル(1-4学年)			第2サイクル(5-8学年)			小学校(1-8学年)		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
2000/01	95.3	70.2	83.0	38.3	22.9	30.8	67.3	47.0	57.4
2001/02	96.2	73.3	84.9	45.4	27.4	36.5	71.7	51.2	61.6
2002/03	94.6	73.5	84.2	52.5	31.9	42.2	74.6	53.8	64.4
2003/04	95.2	78.3	86.9	57.0	36.9	47.1	77.4	59.1	68.4
2004/05	109.8	95.5	102.7	62.0	42.6	52.5	88.0	71.5	79.8
2005/06	123.9	111.2	117.6	67.4	49.8	58.8	98.6	83.9	91.3

ぞれ4年間の第1サイクルと第2サイクルからなり、4年間の中等教育は、それぞれ2年間の一般教育と大学入学準備教育からなっている。10学年を修了すると、大学あるいは技術学校や職業学校に進むことができる。

初等教育第1サイクルでは、第一言語・英語・算数・環境教育(シチズンシップ教育を含む)・体育、第2サイクルでは、第一言語・英語・数学・社会・物理・化学・生物・シチズンシップ教育・音楽/美術(5, 6学年のみ)が科目として教えられている。8学年で地域ごとのテスト、10学年で全国テストが実施される。新学期は9月から始まり、2月までが前期、後期は1週間の休みを置いて2月から6月末までで、年間34週(7-9月の雨期は休業)の授業が行われることになっている。

近年、エチオピアにおける初等教育の就学者数は大きく伸びている。1学年から8学年までの就学者数は1995/96年には370万人であったが、2005/06年には1,475万人と飛躍的に増加している。初等学校の数も1995/96年には12,471校であったが、2005/06年には19,412校となり、これは約56%の増加である(MoE, 2007: p45)。そのうち85%の初等学校が農村・牧畜地域に建設された(MoE, ESDP III: p8)が、こうした就学率の著しい上昇は、二部制による短い授業時間、高い退学率、教科書の不足や無資格教員による指導など種々の事情のために、教育の質の低下という深刻な問題を同時に生み出している。

エチオピア全国の初等教育総就学率は、1996/97年には男子43%、女子26%(Hyde, 2005: p6)であったが、2000/01年に男子67.3%、女子47.0%、2005/06年には男子92.9%、女子78.5%と著しく伸びている(MoE, 2007: p4)。ジェンダー格差はそれぞれ17ポイント、20.3ポイント、14.4ポイントと、わずかに縮小している。

初等教育総就学率(2005/06)をサイクル別に見ると、第1サイクル(1-4学年)の初等学校の総就学率は117.6%であるのに対し、第2サイクル(5-8学年)の総就学率はわずか58.8%であり(MoE, 2007: p4)、5学年の残存率は男子57.2%、女子61.9%、男女合わせて59.3%で、全体的に約6%上昇している(MoE, 2007

表2 州別総就学率 (MoE, 2007: p37より作成)

州	2001/02		2003/04		2005/06	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
Tigray	79.1	76.0	80.6	80.6	100.9	101.0
Afar	13.9	10.8	17.3	11.5	24.2	19.1
Amhara	62.4	53.7	65.4	58.2	89.4	83.3
Oromiya	78.1	46.5	86.8	58.3	100.9	78.6
Somalia	16.1	9.5	19.4	10.0	35.4	24.4
Benshang	111.0	66.1	120.0	80.2	125.6	93.2
SNNPR	83.8	50.9	88.7	59.5	96.9	74.2
Gambela	126.9	77.0	137.9	73.2	167.6	104.6
Harari	123.6	90.5	117.8	90.4	112.9	92.7
Addis Ababa	126.0	130.5	136.1	148.8	135.5	161.3
Dire Dawa	89.3	70.8	93.0	73.0	85.3	73.3
Ethiopia	71.7	51.2	77.4	59.1	92.9	78.5

: p23)。純就学率に関しては、2000/01年には、男子33.7%、女子30.0%であったが、2005/06年には男子98.6%、女子83.9%にまで上昇した(MoE, 2007: p6)。

ちなみに、前期中等教育(9-10学年)の総就学率は、1999/2000年には男子23.8%、女子11.2%、全体で17.5%であったが、2005/06年には男子41.6%、女子24.5%、全体で33.2%に増加した。ジェンダー格差は4.5ポイント拡大している(MoE, 2007: p9)。

全国的には就学率は上昇しているが、州別に見ると大きな格差がある。2005/06年の総就学率は、都市部を多く抱えるアジスアベバ州(男子135.5%、女子161.3%)やガンベラ州(男子167.6%、女子104.6%)では、100%を超えている。ところが、牧畜地域の多いアファール州(男子24.2%、女子19.1%)ソマリ州(男子35.4%、女子24.4%)では、1996年以降、ほとんど大きな変化が見られず、総就学率は極端に低いままである(MoE, 2007: p4)。

(3) 教育政策としての複式学級

前掲の表2から明らかなように、エチオピアの教育開発に関わる最大の課題は、地域格差を縮小することであ

る。つまり、農村・牧畜地域における就学率を高めない限り、EFA (Education for All) を実現することはできない。そこで FAOC (国連食糧農業機関) と UNESCO は2002年に、次のような目標を設定してEFA イニシアティブを立ち上げた。

- ・教育における都市部と農村部の格差を縮小する。
- ・農村部における基礎教育へのアクセスを高める。
- ・農村部における基礎教育の質を改善する。
- ・全国的なEFA および農村開発計画 (Rural Development Plan) として「農村部における教育開発」(Education for Rural People) を計画、実施するために、行政能力を高める。
- ・すべてのミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals), とりわけ、極度の貧困と飢餓、初等教育の完全実施、ジェンダー平等の実現を達成するための第一歩として、「農村部における教育開発」の重要性を強調する。

EFA 実現のための教育政策を推進していたエチオピア政府は、こうした流れを受けて、へき地における初等教育の就学率を高めるために、ESDP IIIのなかで次のような具体策を明記した (MoE, 2005)。

- A 低価格の学校や教室を建設する。
- B コミュニティやNGOによるオルタナティブな基礎教育 (Alternative Basic Education) 学校を奨励する。
- C 複式学級の学校を建設する。
- D 牧畜地域における初等教育を推進する。
- E 学齢期を超えた子どもたちのための教育を提供する。
- F 牧畜民の子どもなど、とくに脆弱な立場にある子どもたちに給食プログラムを実施する。

C複式学級に関しては、以下のように述べられている。

- ・通学に困難なへき地、人口が希薄な地域、牧畜地域において、第1サイクルの小学校へのアクセスを高めるために、複式学級 (学校) を建設する。
- ・複式学級を担当する教員のための研修コースおよび教材をつくる。
- ・教員は複式学級における教授法および学級経営についての研修を受ける。
- ・複式学級の生徒のニーズを満たすように、教科書を自学自習ができ、練習問題も多く盛り込まれたものにする。

このように複式学級の推進がESDP IIIに盛り込まれた背景には、1999-2006年にUNESCO-IICBA (International Institute for Capacity Building in Africa) と教育省によって実施された複式学級パイロットプロジェクトがある。次節で詳しく検討する。

2 複式学級パイロットプロジェクト

(1) パイロットプロジェクトの概要

複式学級パイロットプロジェクトは、次のような目的のもとで、UNESCO-IICBA から財政的、技術的支援を得て、オロミア・アムハラ両州で実施された (又地, 2005)。

- ・エチオピアにおいて、複式学級モデルがどの程度の実行可能性を有しているかを調査する。
- ・複式学級を実施するために必要な専門的知識や技能を、エチオピア政府に確立する。
- ・都市部に高価で大きな学校を建てるのではなく、地方で地域に根ざした小さな学校を建設することの重要性を、エチオピア政府に納得してもらう。

パイロットプロジェクトの実行委員会は、アムハラ州教育局、オロミア州教育局、教育省教員研修計画局、カリキュラム開発研究所、およびUNESCO-IICBA から構成された。それぞれの業務分担は、以下のように定められた (UNESCO, 2006)。

- A. 州教育局
 - ・州レベルのすべての教育活動を監督し、遂行する。
 - ・学校建設の場所を決定する。
 - ・教員を選ぶ。
 - ・複式学級のための教科書を開発する。
 - ・地域社会との交渉をする。
 - ・教員の給与を支払う。
 - ・複式学校の生徒が第4学年を修了したとき、第2サイクルの第5学年への編入を推進する。

なお、複式学校プロジェクトパイロット校の選定基準は次の通りである。

- ・へき地であるが、モニタリングのためにアクセス可能な地域
- ・初等学校の就学率が低い地域
- ・1教室の生徒数が50名を超えないこと

こうした基準にもとづいて、オロミア州では3つの学校、アムハラ州では、2つの学校が選ばれた。2004年に

は、日本政府の草の根無償資金協力により4校が建設された。

B. UNESCO-IICBA

- ・プロジェクトの遂行をすべてにわたり管理および促進する。
- ・教育省との対話を促進する。
- ・関連する機関の人材育成を図る。
- ・プロジェクトのための複式用教科書，教員養成のためのマニュアルなどを開発する。
- ・関連する機関に必要な研修を実施する。

C. 教育省

- ・教員研修を実施する。

D. カリキュラム開発研究所（教育省）

- ・教育の全国的基準および質に関連する事項についてアドバイスを行い，政策を策定する。

複式学校プロジェクトは，次のような段階を踏んで実施された。

表3 複式学級プロジェクトの実施段階

第1段階	学習者中心の教科書執筆者の研修
第2段階	学習者中心の教科書の開発（外部コンサルタントを雇用）
第3段階	教室の建設，机，椅子，可動式両面黒板の準備
第4段階	複式学級で指導する教員の研修

複式学級で異なる学年に異なる内容を教える場合は，普通（単式）学級よりも授業指導が難しいとされる。複式学級で一定の授業の質を維持するためには，いくつかの条件が満たされる必要がある。パイロットプロジェクトでは，以下の条件を整えた。

第一に，各学年の生徒たちが集中して学ぶことができるように，通常より広い教室を建設し，生徒用の机と椅子，教員用の机と椅子を設置した。また，2学年，ときには4つの学年の生徒たちが同時に使うことのできる可動式の両面黒板も製作した。

第二に，複式学級用の教科書を作成した。教育省によって作成された一般の教科書は普通（単式）学級での指導を前提としており，複式学級には適さない。そこで，UNESCO-IICBAは，初等学校第一サイクルの主要教科である第一言語，英語，算数，環境教育，芸術（美術・音楽・スポーツなど）の教科書，および教師用の指導書を開発した。教科書は学習者が学び方を学べるように，

学習者中心の方式が採用されている。学習者に対して明確な指示が記述され，描かれたイラストや表，あるいは質問そのものの中にヒントが隠されている場合もある。年長の子どもが，年下の子どもにファシリテーターとして指導することができるように，配慮されている。これは大人の指導者の数が非常に限られているという理由にもよる。

第三に，複式学級で指導する教員のための研修やワークショップを実施した。例えば，2006年7月10-14日にアジスアベバで実施された複式学級ワークショップでは，教育省，州教育局，UNESCO-IICBAなどによる講義だけではなく，複式学級教授法やカリキュラムなどについて，すでに複式学級で指導している現職教員も交えて議論が行われた。

UNESCO-IICBAが作成した複式学級研修プログラムのテキストは，次のような内容で構成されている。

- ① 複式学級教授法入門編（複式学級の必要性，複式指導の特徴，複式学級の利点と困難点）
- ② 複式学級の効果的な指導／学習法
- ③ 学級経営と授業の組織化
- ④ 複式学級における指導法（説明中心の方法，調べ学習，発問の技術，参加的方法）
- ⑤ 学習教材・資源（地域の人材・教材，印刷媒体，電子媒体，教材の管理・保存法）
- ⑥ 評価方法（チェックリスト法，段階評価法，テスト，評価記録法および報告）
- ⑦ 複式学級の授業カリキュラムと時間割計画

また，UNESCO-IICBAによる複式学級指導教員のための教員研修では，ノルウェーとイギリスの研究者によって開発されたハンドブック Making Small Schools Work: A Handbook for teachers in small rural schools が用いられた。このハンドブックでは，小規模学級のポジティブな特色として，次の点があげられている（Sigsworth & Solstad, 2001: p9）。

- ・小規模校には，短所だけではなく長所もある。個々の小規模校にはそれぞれ固有の長所があるので，それらを明確にして，学校運営の出発点にすべきである。
- ・小規模校における「教える時間」（teacher time）はもっとも貴重なものであり，教授活動以外に浪費すべきではない。
- ・小規模校の組織構造には顕著な特徴があり，これらの特徴を学校運営や教授・学習活動に活用すべきである。
- ・小規模校は，教員も生徒もともに人数が少ないので，

学校活動を性別で分けて行うことは難しい。小規模校は、ジェンダーフリーな場でなければならない。

- ・教師だけが、知識を独占的に有しているのではない。フォーマルな知識だけではなく、地域の人々のもっているローカルな知識も活用すべきである。
- ・学校とコミュニティは、相互に教育的な活動を生み出すことができる。学校とコミュニティをともに巻き込むような実践的な活動を組み込むべきである。
- ・同じような考え方をもっている学校との協力が重要である。意見を交換したり、相互にアドバイスをするために、可能な限りの方法で連絡を取り合うべきである。

ともすれば、へき地にあるということで教育行政から軽視されがちで、教師自身も孤立しがちであるがゆえに、小規模校教育に対してネガティブな意識をもちやすい。そうした教員の意識を変えるために、へき地における小規模学校のポジティブな特色を明らかにし、それらを生かすことの重要性が強調されているのである。

(2) オロミア州におけるパイロットプロジェクト

オロミア州では2002年より3つの複式学校が開設され、2003年に内部評価が行われた(Leka, 2003)。それによると、通常の公立学校への通学距離の平均が3.1kmであるのに対して、複式学校への通学距離の平均はわずかに1.1kmである(もっとも、複式学校さえ存在しない地域はまだ多いのであるが)。通学距離が短くなると、通学途上で女子が誘拐^(注)される危険性が少なくなり、また、女子が家事を手伝うための時間も生み出され、女子が通学するための機会費用は減少する。実際、オロミア州で複式学級パイロット校に指定された小学校では、いずれも男子よりも女子の方が多く登録している。しかし、退学が多いのも女子である。が、通常の公立初等学校の退学率27.5%(EMIS2002:16)と比較すると、複式学校の退学率5.6%は非常に低いといえよう。

表4 複式学級パイロット校の登録者数と退学者数

(Leka, 2003: p20)

	登録者数			退学者数		
	男子	女子	計	男子	女子	計
Sayoo Gara	11	27	38	0	0	1
Wale Baboo	18	20	38	1	1	2
Tegi	52	68	120	2	8	10

複式学校に通学している子どもたちのほとんどが、これまで学校に通ったことがなく、年齢は8歳から15歳までと幅が広い。この地域では、子どもたちは両親の仕

事を手伝い、家計を支えることを期待されている。女子は母親を助けて料理や掃除、水運び、幼い弟妹の世話をし、男子は家畜の世話や、畑を耕したりすることが求められている。こうした現状を考慮して、学校の授業時間は、子どもたちの経済活動を大きく妨げることがないように、柔軟に決められる。通常の公立学校に比べて授業時間が短く、農繁期に学校を休みとしている。

(3) Wale Baboo 校の事例

今回の現地調査では複式学級パイロット校に指定されている2校を訪れたが、1校では生徒数が300名を超えたため、第1サイクルの4学年とともに普通(単式)学級となり、複式学級の最後の4学年(生徒数18名)のみが残り、普通(単式)学級の授業を行っていた。ここでは、今なお複式学級指導を継続している小学校について、詳細を報告する。

訪問した Wale Baboo 小学校は、首都アジスアベバから車で約2時間の西シェワ・ゾーンの農牧地域に位置する、住民約900名のコミュニティに建設された。学校建設にあたっては、地域住民が土地を寄付したり、労働力を提供したり、といった協力を惜しまなかったという。

この学校は、1993年に生徒数20名という小規模複式学校として開校され、以後、毎年生徒が増加し続け、1998年には53名、2006年には391名となり、そのうち58名が複式学級で学んでいる。普通(単式)学級は、4学年とも各クラス70-80名の規模で、午前中に1,3学年、午後2,4学年の授業を行う2部制をとっており、教員は男性4名、女性2名である。

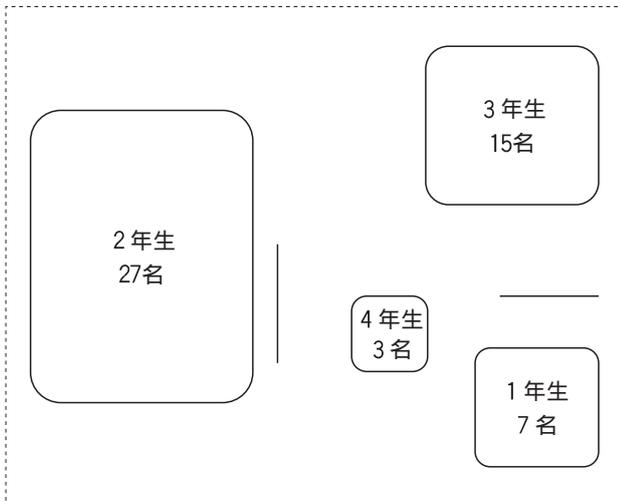
この学校が IICBA によるプロジェクトのパイロット校に指定されたのは、2002年である。複式学級は本来、各学年とも少人数で構成されるべきであり、従って、2学年の27名、3学年の15名は多すぎる、というのが複式担当教員および教育行政官の一致した見解であるが、隣接している普通(単式)学級のクラス規模を勘案して、やむをえず複式学級を58名にしたという。どの生徒を複式学級に所属させるかは、1家族から2名以上の子どもを選ばないという配慮のもとに、籤で決めている。

複式学級を指導している教師は34歳の男性で、普通(単式)学級で8年間、複式学級で6年間の経験を有している。UNESCO-IICBA 主催の複式学級指導に関するワークショップに4回参加し、タンザニアで開催された複式学級指導のワークショップに、エチオピアから派遣された唯一の教員でもある。

訪問した複式学級では、各学年の配置は図のようになっていた。教室には、各学年グループの境に両面黒板が準備されており、教師が板書を行ったり、生徒が練習問題を解いたりするのに使われる。教室の壁や天井には、



複式授業の様子
(手前が4年生3名,奥が2年生27名,間に両面黒板)



教室の図

教師が描いた植物や動物の絵, アルファベットなどが貼られ, 手作りの学習教材(廃品を利用したドラム, アルファベットや単語を書き込んだ模造紙など)も準備されている。

生徒数58名のうち, 1年生7名, 2年生27名, 3年生15名, 4年生3名, 欠席6名で, いずれの学年も大きい子どもから小さい子どもまで数歳の年齢幅がある。第一言語であるオロモ語の授業では, 教科書の課題に沿って, 主として1年生はアルファベットの読みと発音, 2年生は文章の音読と解釈, 3年生と4年生は文章を板書する授業であった。

複式学級では, 1コマ40分の授業を1日に6コマ行っている。教師は, 生徒たちに指示を与えながら, 次から次へと学年のグループを移動するので, 生徒と教師の接触時間は短い, それぞれの学年の人数が少ないので, 生徒たちはリラックスした気分で, 教師の説明を聞いたり質問をすることができる。教師が他の学年で説明をしているとき, 生徒たちはそれぞれの課題を与えられる。ほかの学年の子どもの声が聞こえてくるにもかかわらず, 自分たちの授業にかなり集中しているように見え

る。

個人個人で教科書の練習問題に取り組む場合もあるが, グループ全体で音読したり, 話し合う場合もある。たとえば, 1年生の子どもたちは, 一人一人順番に前に出てきて, 黒板に書かれたアルファベットを指しながら, 読みと発音の音頭をとっていた。こうしたなかで, 互いに協力したり教え合ったりする空気が生み出される。同じ学年のグループであっても, かなりの年齢幅があるので, 年長の子どもがリーダーシップをとる場合も出てくる。

子どもたちの好きな科目は地域の共通言語であるオロモ語であり, ついで, 算数と環境教育であるという。環境教育とは, 地域の自然環境や地球環境の保全といった内容ではなく, エチオピアの文化や伝統の紹介, 家畜の世話の仕方, 手の洗い方や保健衛生の知識など, 日々の生活の中で身の回りの環境を理解し, 活用して行くために必要なライフスキルが盛り込まれている。

Wale Baboo 校の複式学級から, 2004年度に16名, 2005年度に14名が, 第2サイクルの初等学校に編入したが, そのうちインタビューを行った2名の女子生徒はそれぞれ13歳と14歳で, 現在7学年である。この第2サイクルの学校は各クラス約90名で, 午前と午後の二部制をとっている。2人とも第1サイクルの複式学級への通学時間は5分程度であったが, 現在は片道約1時間歩いて通学している。女子生徒たちは次のように話す。

「複式クラスのほうが先生と親密な関係で, わからないことについても質問しやすい。質問したら, 先生が応えてくれるし, 友達も教えてくれる。今の学校では, 質問しにくいし, クラスの誰も教えてくれない。通学に時間がかかるので, 家事をしたり宿題をする時間がとりにくくなった。中等学校に進学して, 将来は先生になりたい。できれば, 複式学級の先生になりたい。」

教員へのインタビューによると, この地域の家族の平均人数は6人から7人で, 通常の公立学校に通学している子ども, 複式学校で学んでいる子ども, 学校に通っていない子どもなど, さまざまである。この学校に通っている子どもたちの通学時間は5分から15分であり, 女子が誘拐される心配は少ない。

この教員は複式学級で教えるための教授法を修得しており, 子どもたちとも親密な関係を築いているようである。が, 机や椅子, 教材の不足, 教科書の遅配や, 便所が使えないといった状況に対しては満足していない。また, 郡教育事務所が複式学校を通常の公立学校と同じようにみなしておらず, 軽視されていると感じているようである。

インタビューをしたある保護者は, 男子児童の父親で, 農業に従事して小麦や豆を生産している。1学年から11

学年まで9人の子どもがおり、そのうち1名のみが複式学級で学んでいる。彼が子どものときには近くに学校がなかったので、学校ができて、子どもにはぜひ教育を受けさせたいと思うようになった。学校の建設時から学校運営委員会(地域住民4名と教員4名で構成)のメンバーとして、積極的にかかわってきた。生徒数が増えたので、毎月1人3ブル(約52円)ずつ集めて資材を購入し、地域の人々を動員して教室を2つ増設した。野良仕事の合間にとときどき学校に立ち寄って教師と話し、欠席している生徒がいれば、その生徒の保護者に話をすることもあるという。

学校ができておおいに喜んでいるが、椅子や机は十分ではなく、水もない。この地域でまだ200人以上の子どもが学校に行くことができていない。すべての子どもたちを受け入れることができるように教室を増設するとともに、将来は成人のための夜間識字教室も開設したい、とのことである。

3 複式学級の意義

(1) 教育政策に対する影響

エチオピア政府が複式学校の成果を認識し、へき地における初等教育を拡充するための一つの政策として、複式学校モデルが採用されるようになった。総就学率が男子92.9%。女子78.5%(2005/06年)まで上昇した現在、初等教育を完全実施するためには、近隣に学校のない地域での学校建設が当面の課題であるという認識のもとに、複式学級を教育政策の中に盛り込むようになったのである。都市部に高い費用をかけて大規模な学校を建設するのではなく、地域に根ざした小規模な学校を農村(へき地)で建設することの重要性が理解されるようになった。このことは、複式学級に関する記述が2002年のESDP IIでは4カ所であったが、2005年のESDP IIIでは一つの節がすべて複式学級についての記述になっていることにもあらわれている。

(2) 教育の質の向上

就学率の急激な上昇が、大規模クラスや二部制などを伴う場合、あるいは、教員の質が低い場合は教育の質が低下する可能性が高く、このことはエチオピアにおいても憂慮されている。複式学級ではどうか。

IICBA が2003年に実施した学力調査(Leka, 2003)では、チャンチョ村の複式学校、テギ町の複式学校、テギ町の通常の公立学校、アカキ町の私立学校の4つの学校が対象とされた。4校の生徒たちはいずれもオロモ語を話す家庭の出身で、民族的、社会・経済的な背景がほぼ同じである。首都アジスアベバから15キロ離れたアカキ

町の私立学校だけは、エチオピアの国語であるアムハラ語を教授言語としているため、この学校の成績は、アジスアベバのアムハラ語を話す生徒たちの、アムハラ語以外の科目の成績に準拠して調整された。学力テストは4つの学校で州教育局の監督のもとに行われ、回答時間は生徒が必要なだけ与えられた。

学力調査の結果は以下のとおりである。英語に関しては、テギ町の複式学校の得点は88%、テギ町の通常の公立学校は46%で、アカキ町の私立学校とチャンチョ村の複式学校の成績は、それぞれ77%、75%であった。算数に関しては、テギ町の複式学校の得点は62%、テギ町の通常の公立学校は70%で、アカキ町の私立学校とチャンチョ村の複式学校の成績は、それぞれ57%、74%であった(Leka, 2003: pp24-25)。(成績結果は男女別には集計されていない。)

表5 複式学級と普通(単式)学級の得点比較

(Leka, 2003: p25より作成)

複式学級		得点平均(%)	普通(単式)学級		得点平均(%)
テギ小学校	算数	62	テギ小学校	算数	70
チャンチョ小学校	算数	74	アカキ私立小学校	算数	57
テギ小学校	英語	88	テギ小学校	英語	46
チャンチョ小学校	英語	75	アカキ私立小学校	英語	77

2005年に実施された別の調査によると、複式学校と通常の公立学校の平均点は英語ではそれぞれ81%と61%、算数ではそれぞれ68%と63%である。概して複式学校のほうが成績が高く、とりわけ英語においては20%の開きがある(Leka, 2005: p37)。この調査では、対象となった4つの学校の1学年当たりの生徒数、生徒一人当たりの教科書や教材の数、教員の現職研修の実情などは明記されていないので、即断は避けなければならないが、複式学級における学習者中心の指導法や、小規模校における教師と生徒との親密な人間関係などが反映していると考えられる。

オロミア州の初等学校第1サイクルの登録に関する男女格差は22.9%(全国平均は20%)であるが、テギ町の男女格差は21%と、わずかに低い。(Leka, 2003: p26) 2005年の時点では、すべての複式学校において、男子よりも女子の登録者の方が多くなっている(OEB, 2005A: p3)。

以上の結果から、IICBAは、通常の公立学校と同じ条件に加えて、複式学級の教員に適切な研修が実施されれば、複式学校がより効果的で、ジェンダーに関してもより平等な教育を実現することが可能であると見なしている(Leka, 2005)。

前述した学力テストの結果より、へき地の小規模な複式学級で学んだ生徒たちの方が、通常の公立学校の生徒たちよりも高い成績をおさめうることが明らかになった。また、複式学校プロジェクトで開発された学習者中心の教科書づくりの方法が、他の教科書作成にも活用されるようになり、教育の質の向上に貢献しつつあるという。

(3) コミュニティへの影響

学校がコミュニティの近くに建設されたことによって、保護者にとって子どもたちの遠距離通学への不安が減少した。また、複式学校が建設される以前は、多くの保護者は子どもたちの教育にそれほど関心を持たなかったが、学校が建設されると熱心に子どもたちを学校に通わせるようになった。つまり、コミュニティの近くに学校が建設されることによって、教育に対する保護者の意識に望ましい変化が見られるようになったのである（EMC, 2005: pp3-4）。

複式学校に対する保護者や地域の人々の評価は、概して高い。複式学校に通っている子どもたちは、通常の公立学校に通っている子どもたちよりもたくさんのことを学んでいるが、それは複式学級のために作られた教師用指導書が優れているからである、と保護者は思っている。また、保護者は、子どもたちの性別にかかわらず、子どもの教育に対して非常に熱心で協力的である。これまで教育を受ける機会のなかった保護者たちは、子どもたちが教育を受けることによって、社会階層を上昇することができるという楽観的な希望を抱いているようである（Leka, 2003: pp21-22）。授業時間が農作業に忙しい時期を考慮して設定されているので、子どもたちを学校に通わせやすいという利点もある。

複式学校が設立された地域では女子の誘拐が減少した。それとともに、誘拐に対する地域社会の意識も高くなった。誘拐に対する罰が成文化され、誘拐罪として訴えられるようになった。また、女子の早婚に対する母親の態度も変わりつつあるという。

複式学校では、オロモ語で授業が行われるために、子どもたちにとっては理解しやすく、保護者にとっても、自分たちの文化が維持されることとして歓迎されている。保護者には、学校教育が子どもたちの能力を高め、健康面でも社会的にも子どもたちの人生を豊かにするだろうという期待がみられる。

複式学校は、地域における集会場所として利用されるなど、多くの機能を有しているため、地域社会における共有財産だと見なされている。このことは、学校の教室やフェンスなどを建設するために参加を要請された場合には、地域の人々は積極的に参加するという点にもあら

われている。

以上のように、複式学校に対する保護者や地域の人々の見方は肯定的で、教育に対しても進歩的な考え方を持っている。このことは、彼ら自身が複式学校の建設に深くかかわって協力した、という事実と切り離すことができないだろう。インタビューに対して期待される回答を行ったという可能性もあるので、額面通りに受け取ることはできないとしても、通常の公立学校に対する関わり方や見方に比較すると、複式学校に対する保護者や地域の人々の見方はより肯定的であると考えられる。

複式学校は規模が小さいが、地域社会にとっては大きな存在である。通常の公立学校が学校教育のためだけにしか使われていないのに対して、複式学校は地域社会の中で多くの機能を果たしている。たとえば、テギの複式学校は、農民たちが信用貸しで肥料を受け取るための場所として活用されている。

保護者が教室を増築したチャンチョの複式学校では、エイズの感染予防のためのドラマが演じられ、それを見るために、地域の人々が集まってきた。複式学校のこうした効果は、ユネスコや政府の当初の思惑とは別のものである。「学校が地域の集会所になった」「重要な会議や行事は複式学校で行う」といった声が多く聞かれる。

4 複式学級の課題

複式学級パイロット校はオロミア州に3校、アムハラ州に2校を建設し、さらに2004年に日本政府の草の根無償資金協力によって4校が建設された。が、これら9校のうち、6校が普通（単式）学級に変更され、3校のみが複式学級を存続させている。学校が建設されるまでは、自分の子どもたちを就学させることに関心をもたなかった地域住民が、学校が建設されると次々と子どもたちを学校に行かせるようになった。そのため、教室が足りなくなり、コミュニティが資金を出し合っただ敷地内に教室を増設した。それでも1クラスの人数が多くなり、普通（単式）学級に再編成されたのである。

「へき地であるが、モニタリングのためにアクセス可能な地域」という基準によって学校建設サイトを選び、潜在的な就学者数の把握が十分でなかったことが原因であろう。こうした課題を残しながらも、パイロットプロジェクトは前述したように複式学級の意義を明らかにしたといえよう。

複式学級の重要な課題として、教育の質の向上をあげることができる。これは複式学級だけではなく、エチオピアの教育全体にかかわる課題である。教育の質にかかわる要因の一つである教員の質に関しては、教員研修が普通（単式）学級の指導を前提としているため、複式学

級の指導のための研修を強化する必要がある。さらにいえば、一般的な教員研修および教員養成機関のプログラムに複式学級での指導法を、必修かあるいはそれに近いかたちで入れることができれば、教育の質を高めることができるであろう。

なぜなら、多くの開発途上国では就学年齢が一樣ではなく、加えて落第や休学などによって、普通（単式）学級の生徒たちの年齢幅が大きく、実質上複式学級とあまり変わらないからである。複式学級で推奨される指導法は学習者中心で、教員は、生徒たちの発達段階に応じて生徒の学びをサポートするファシリテーターとして位置づけられる。学習者の発達段階や能力に応じて、学習者中心の授業を展開しようとする複式学級のための教授法は、大規模学級の教室に座っている生徒たちを一律にとらえて、知識を一方向的に与えがちな普通（単式）学級の教員にとっても有効であろう。

終わりに

複式学校か、あるいは普通（単式）学級の学校か、という選択肢は人口の希薄な農村地帯では、現実的ではない。開発途上国のへき地ではかなりの数の学校で複式学級が展開されているにもかかわらず、教育行政によって認識されることはほとんどない。複式学級は、できれば普通（単式）学級に移行させるべき、いわば二流の存在であるかのようにみなされることが多い。教科書は普通（単式）学級を前提に執筆され、教員養成機関や現職教員研修でも普通（単式）学級を前提とした指導が行われている。複式学級を担当する教員自身が、複式学級をネガティブにとらえている限り、教育効果を期待するのは難しい。複式学級のポジティブな特色を十分に理解し、その良さを生かすような指導をし、教育計画を立て、実践することが求められる。そのための教員養成および現職研修の充実が必要であろう。

注

かつて、若い女性が通学途上で誘拐（abduction）されるという出来事が地域によっては頻発し、そのリスクを避けるために女子を就学させないという声が聞かれた。誘拐は、結婚儀式（親戚や近隣の人たちを披露宴に招待するなど）の費用を賄えない男性が、女子を誘拐したあとで、その女子の保護者にわずかな金品を渡して、同居を認められるという風習によるものである。

参考文献

- Berry, C. (2004) Multigrade Teaching: A Discussion Document, downloaded from the website of the Institute of Education, University of London (<http://www.ioe.ac.uk/multigrade>)
- Ethiopia Multi-grade Committee (2005) Final Report on Multi-grade School Expansion Project, Ethiopia Multi-grade Committee, Addis Ababa
- Hyde, k., Bela y, D., Beyene, A., Biazen, A. and Kedir, N. (2005) Taking Stock of Girls' Education in Ethiopia: Preparing for ESDP III, Save the Children, UNESCO and UNICEF, Addis Ababa
- Institute of Curriculum Development and Research (2006) Guidelines for Providing Multigrade Education, Discussion Paper, MoE, Addis Ababa
- Leka, W. & Gray, A. (2003) Internal Assessment Report, Multi-Grade Project, UNESCO-IICBA
- Leka, W. & Allen, T. (2005) Internal Assessment Report, Multi-Grade Project, Amhara Region, UNESCO-IICBA, Addis Ababa
- MoE (2002) Education Statistics Annual Abstract 2001-02, Addis Ababa
- MoE (2005) Education Sector Development Program III, Addis Ababa
- MoE (2007) Education Statistics Annual Abstract 2005-06, Addis Ababa
- Shibeshi, A. (2005) Education for Rural People in Ethiopia, FAO, IIEP/UNESCO and ADEA, Addis Ababa
- Oromia Education, Bureau (2005A) Experiences on Multigrade Teaching, Oromia Education Bureau, Addis Ababa
- Oromia Education Bureau (2005B) Oromia National Regional State, ESDP- III, USAID, Addis Ababa
- Sigsworth, A. and Solstad, K.J. (2001) Making Small schools Work, A Handbook for Teachers in Small Rural Schools, IICBA/UNESCO, Addis Ababa
- UNESCO (2006) Multigrade Pilot Project in Ethiopia, Report on the Concluding Workshop, UNESCO IICBA, Addis Ababa
- 又地 淳 (2005) 発表資料 (2005年12月9日 教育勉強会, アジスアベバ)
- ユニセフ (2006) 世界子供白書